地質ニュース　451号，48-56頁，1992年3月
Chishitsu News no. 451, p. 48-56, March, 1992

ナウマン博士ゆかりの人と所をたずねて

II. ミュンヘン

山下　昇[1)]

1. ナウマン対鷗外論争——1. 前哨戦

あの鷗外が懊悩した．1886年3月6日，ナウマン博士はドレスデンの地学協会で講演を行った．それを聞いて憤慨した森鷗外は，ナウマンに反論した．ただしこれは，講演会の席でナウマンの演説内容に真正面から反撃したものではない．その後で開かれた宴会の席で，ナウマンが行ったテーブルスピーチに対し，同じくテーブルスピーチをもって一矢をむくいたのであった．

とはいっても，鷗外の発言はなかなか機知に富んでいて，雰囲気としては大成功であった．以下，『独逸〔ドイツ〕日記』から要所を引いて紹介するが，鷗外の文章はドレスデンを徳停府，バイエルンを拝焉と書くなど，古風で読みにくいので，現代風に書き変えることにする．また，句読点を補充し，原文にはないことであるが，ナウマンやロオトあるいは鷗外自身の言葉を引用紹介した部分については，それを引用符でくくっておくことにする．

「六日．夜地学協会の招に応じ，その年祭に行く．この夜の式場演説は日本という題で，演者はナウマンである．この人は久しく日本に在って，旭日章を受けて郷里に帰ったが，なぜかすこぶる不平の様子がある．いま三百人あまりの男女の聴衆に対して，日本の地勢風俗政治技芸を説明する．その間不穏当な言が少なくない．たとえば彼がいう．

『諸君，日本が開明の域へ進んでいる状態にあるのを見て，日本人が，その開明の程度が欧州人に劣っているのを知り，自ら憤激して進取の気性を示したものと思いなさるな．これは外人にせまられて，止むを得ず，その状態になっているのである』と．

また，その結末で次のようにいう．

『これでまず日本の形勢の概略を話し終わった．そこで今，一つの笑話をもって終わることにしよう．

ある時，日本人が一隻の輪船を買い求めた．新しく航海の技術を学んだ日本人は，得意揚々としてこれに乗り，海外に航海した．数カ月の後，故郷の岸に近づいたのに，あわれなことに，この機関士は機関を運転することは知っていたが，これを止めることを知らなかった．そこで近海をさまよって，機関が自分で止まる時を待った．日本人の技芸はたいていこのようなものである．私は，いつか〔日本人が〕このような弊を脱することを望む』と．

私はこれを聞いて平静ではいられなかったが，これはこの日の式場演説で，反論が許されない．私は懊悩をきわめた．ロオト〔鷗外が親しくしていたドイツ人〕が私の様子を見て私の前に来ていう．

『君は不平のように見える．何故なのだ．私から見ると，ナウマンの論は大いに日本の開化を願う意味である．すこぶる妥当なもののようである』と．

私が思うに，ロオトは日本の開明の程度を知らない．だからナウマンの言を妥当なものと見るのである．ロオトほどの有識者でさえも，この有り様である．まして他の人は……．と，私の不平はますますつのり，飲食してもすべて味もわからない．」

これは日記の文であるから，文章の構成がいくらか雑であり，終わりの方は，講演会後の宴会の席での話に移行している．

鷗外は反撃の機会を逃がさなかった．続けて『独逸日記』の文を紹介しよう．

「ナウマンは私と向かいあって座っている．ロオトはナウマンの左に座っている．まず会長某の演説がある．またある軍医は起立し，諸国の婦人社会の現況を話し，終わりにドイツ婦人の幸福を賀し，貴婦人万歳を唱えた．ロオトは起立し，遠征の利点を述べてナウマンを誉め，次に遠来の客に及んだ．遠来の客とは私とロ国のワアルベルヒとを指すのである．

ナウマンが答辞を述べる．その中でいうのに次のようなことがあった．

1) 信州大学名誉教授 〒153 東京都目黒区青葉台4-2-2

キーワード：ナウマン，ミュンヘン古生物学博物館，森鷗外，トルコ人通り，横山又次郎，チッテル，小堀桂一郎，普通新聞

『私は長く東洋にいたが，仏教には染まらなかった．理由は何かというと，仏がいうところでは，女子には心がないと．貴婦人よ．私はそんなことを信じることができない．私が仏教に染まらなかったのは，このためである』と．

私はこれを聞いて驚きかつ喜んだ．いったい式場演説というものは反論するわけにはいかない．しかし，酒間の戯語は反論してもよい．ここで彼を談笑のうちに屈伏させるならば，これをもって，今夕の恨みをはらすことができよう．私はロオトに発言〔の許可〕を求めたところ，ロオトは直ちに会長に伝え，会長もまた許した．私は起立して演説した．その大意は次のようなものであった．

『在席の皆様．私がつたないドイツ語でもって，皆様，特の貴婦人に申し上げたいのは他でもない．私は仏教の世界の人間である．仏教徒として演説しましょう．今のナウマン君の言によると，仏者は貴婦人方に心がないといっているとのことである．すると貴婦人方は，私もまたこの考えをもっているとお思いになるであろう．だから私は弁明しないわけにはいかない．

いったい仏とは何か．覚者の意味である．経文の中には女人が成仏したという例が多い．これは女人もまた覚者となるのである．女人は覚者となることができるのである．どうして心がないなどということがあり得ようか．貴婦人方よ．私はいささか仏教信者のために冤(えん)をそそぎ，私が貴婦人方を尊敬することが，決してキリスト教徒に劣らないことを証明したいだけである．願わくば皆さん，私とともに杯を挙げ，婦人の美しい心のために傾けて下さい．』

私の言葉が終わらないうちに，一等軍医エエルスは，その夫人と一緒に私の傍に来ていう．『私の妻は婦人を代表して君の演説にお礼をいう』と．その他，一等軍医のバアメルとキルケ等，皆私の演説を誉める．私の愉快さ，分かるであろう．……」

鷗外の得意さが目に浮かぶようで，特に解説を加える必要はないであろう．ただ，覚者という語を何と訳したらよいか，仏教にうとい私には自信がないが「悟りをひらいた人」というほどの意味であろうか．

ドレスデンからミュンヘンへ．鷗外は，この事件の翌日，すなわち1886年3月7日夜9時の汽車でドレスデンを発ち，ミュンヘンへ向かった．着いたのは翌日の11時，したがって14時間を要している．この日から翌1887年4月15日まで，およそ1年と1カ月間，鷗外はミュンヘンに滞在した．

他方，ナウマンもまたマイセンを離れてミュンヘンに移り住んだ．その日時は定かでないが，この年の6月末にはミュンヘンで発行されていた『普通新聞』に「日本列島の地と民」という文を発表し，またミュンヘンの人類学協会で「日本及び日本人」という演題の講演を行った．だから，鷗外がミュンヘンに移って暫くの後，かつ4月末のドイツ地理学者大会に出席した後間もなく，ナウマンもまたミュンヘンへ移り住んだと推定される．そして，この新聞記事がまたまた鷗外を憤激させた．これに端を発する『普通新聞』紙上での応酬が，世にいうナウマン対鷗外論争である．

ただし，ここでは，この話をいったん保留し，“たずねる旅”の本筋にもどることにしよう．

2.　博士はトルコ人通りに住んでいた．

大学の西の“トルコ人通り”．ナウマン博士は1885年夏に日本からドイツへ帰った後，しばらくはマイセンに住んでいたが，やがてミュンヘンに移り住んでミュンヘン大学の私講師となった．その後1898年に辞職するまで，12年間ほどミュンヘンに住んでいたことになる．

その旧居を探し出して下さったのは，博士の孫にあたるD．ナウマン氏である．同氏のことは後で紹介するが，同氏の祖母つまりナウマン博士夫人の死亡届けや，尊父の旅券などを調べて，当時の住所が分かったということであった．

博士の旧居はミュンヘン市街の中心に近い“トルコ人通り”（Türkenstraße）にあった．ミュンヘン市の中心であるマリヤ広場の少し西から，北（厳密にはN17°E）へ延びるルートヴィヒ通りという大きな道路がある．中心からこの道路を北へ約1.5km行った右（東）側にバイエルン国立図書館がある．その少し先の左（西）側がミュンヘン大学で，さらにその先には鷗外の『うたかたの記』にも出てくる凱旋門（写真1）がある．

写真1　ルートヴィヒ通りの凱旋門．
森鷗外の「うたかたの記」の冒頭に，この門のことが出て来る．

ミュンヘン大学の裏手というか，西へ二つめの通りが“トルコ人通り”であるから，これはルートヴィヒ通りと平行して，やはり南北に走っている．ただし，狭い道路で，車は人を避けながらのろのろと走っている．両側の店もすべて小商店である．学生の姿が多いので，全体として大学町の裏通りといった感じである．

ナウマン博士の旧居．博士が最初に住んでいた95番地は通りの西側で，現在は映画館になっている．映画館といっても，日本と違って看板が地味であるから，注意してみないと映画館だとは気がつかない．次はそれより数百メートル南で，やはり通りの西側にある75番地である．多分家族が増えたりしたために転居したのであろう，というのはD．ナウマン氏の推測である．この通りから西へ分かれる“花通り”(Blütenstraße) という短い道路と丁字路になっている角の建物である．5階建ての黄色の壁が大変目立っている（写真2）．角の店は旅行案内店で，その右側に，2階以上を占める住宅への入口があり，さらにその右は八百屋と薬屋である．

住宅への入口は古めかしい頑丈な樫の木の扉で，左側の柱には，ここに住む人達の表札が出ている．表札といっても，われわれの名刺くらいの大きさであるから，よほど近寄って，眼鏡をかけないと読めない．この扉を入ると，2階以上へ上る階段があって，その横を通り抜けると，建物の裏手の中庭に出られる．この庭から見上げると，各住居の窓が見える（写真3）．窓と窓の間隔などから推定すると，1戸あたりの面積はあまり大きなものではないようで，日本の集合住宅の3LDKといった程度ではあるまいか．

写真2　ナウマン博士の旧居，トルコ人通り75番地の建物．
1階は商店，2階以上が住宅になっている．5階建ての大きなビルで，黄色に塗られた壁が印象的である．

写真3　ナウマン博士旧居の建物の裏側．
ナウマン博士が住んでいたのがどの部屋であるか不明であるが，表から見ても裏から見ても，決して豪勢な住居ではない．

3.　ミュンヘン古生物学博物館

リヒアルトーヴァークナー通り．ミュンヘン古生物学博物館 (Paläontologisches Museum München) は上記のトルコ人通りよりさらに三つ半ほど西へ行った所にある．通りの数え方に三つ半はおかしいが，三つめと四つめの街路が正常な道路で，博物館のあるリヒアルトーヴァークナー通りは，その間にある短い通りである．しかも途中で鉤の手に二度曲がっている．

この博物館（写真4）にはナウマン博士が研究した化石の標本が保存されている．1880年の「蝦夷島（北海道）における白亜紀層の産出について」という論文の材料となったもので，その大部分はアンモナイトである．ナウマン博士自身は北海道を旅行したことはないが，北海道の地質調査で有名なB．S．ライマン氏が採集したものについて，ライマン氏からナウマン博士に研究が委託された．ところが，これを鑑定するのに必要な文献が当時の日本にはなかった．そこで博士は1879～1880年にドイツへ一時帰国したとき，ミュンヘンでこれを研究した．その成果が上記の論文である．

写真4　ミュンヘン古生物学博物館．

その標本がこの博物館に保管されたのであるが，その後，横山又次郎博士がこれを研究し，「日本白亜系産の化石」という表題で1890年の「古生物誌」（パレオントグラフィカ）に発表した．最初にナウマン博士が研究したときは，属・種を鑑定してその年代を決めるという点に力点が置かれた．だから，新種と認められるものも，文章による簡単な記載——主として既知の属・種との比較——があるだけで，新種として命名されることはなかった．横山博士は，これを正式に記載して新種には新しく命名した．

この標本（写真5）の存在自体は以前から分かっていたことであるが，それが戦災を免れて無事であることが確認できたのは，やはりキッパース氏の努力によるものである．そのことは，この博物館の職員であるマイヤー博士との事前の連絡によって判明した．

北海道のアンモナイト標本．マイヤー博士は，もろぶたにぎっしりとつまったアンモナイト標本を出しておいて下さった．この博物館も戦災をこうむったのであるが，一部の標本は破壊を免れた．マイヤー博士がこの標本を再発見したのは，標本のコンピューター登録を進めている過程においてであった．標本は，我々には馴染みの深い，北海道のアンモナイト化石に特有の岩質である．ナウマン博士は上記の論文の中で「蝦夷白亜系の化石を含む岩石はほとんどすべて石灰岩である」と書いているが，現地を見たことがなく，送られてきた化石標本だけを見た人の判断としては当然なことであろう．

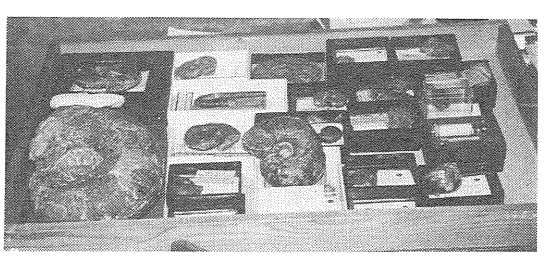


写真5　ナウマン・横山両博士が研究したアンモナイトの標本．ミュンヘン古生物学博物館も第二次大戦の戦災を受けたが，これらの標本は無事であった．

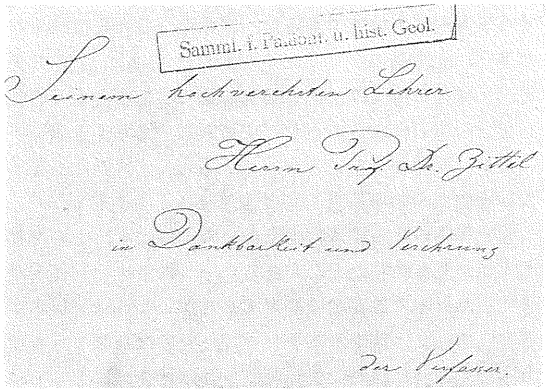
哺乳動物の化石標本は無くなった．他にも，この博物館で私が見たかったものがある．一つはナウマン博士が研究した日本の象化石の標本であるが，これは原標本が日本にあって，博士がドイツへ運んだのは石膏モデルであった．これは戦災で失われた．この博物館にとっては気の毒なことであったが，原標本が日本に残っているのであるから，まだしもである．

取り返しがつかないのはナウマン博士の博士論文の材料となった標本で，これは哺乳動物を主とするものであった．この標本は1944年7月の英米軍の爆撃で失われた．ナウマン博士の論文の表題は「シュタルンベルク湖の杭上住居址の動物群」である．シュタルンベルク湖はミュンヘンの南西20kmにある氷河湖で，その湖畔の遺跡からたくさんの骨化石が出土していた．鳥類や人骨も含まれていたが，大部分は哺乳動物であった．

博士はチッテル教授の一番弟子であった．マイヤー博士は事前に「チッテル」という論文（チッテルの生涯や業績などをまとめたもの）の別刷を送って下さった．チッテル教授（Karl Alfred von Zittel, 1839-1904）の生誕150周年を記念して書かれたものである．その中にはチッテル教授から博士号をもらった人のリストがあって，数えてみると50名に達する．その中にはナウマン博士の名はない．ところが，マイヤー博士からの手紙によると，ナウマン博士がチッテル教授の弟子であったことは間違いない，という．

それは今回，私のためにナウマン博士の博士論文を探したところ，その別刷をチッテル教授に贈呈したものが出てきた．その最初に手書きで書いてある献呈の辞（第1図）からみても，ナウマンがチッテルの弟子であったことは間違いない．自分が「チッテル」の論文を書いた当時は，そのことがまだ分かっていなかったのである，と．

他方，ミュンヘン大学資料室のスモルカ氏から送っていただいたナウマン文書については，昨年10月の段階では，私はまだこれを十分には読みこなしていなかったのであるが，このほど，ひととおりの分析を終わった．驚いたことに，その中には1874年の秋から始まって12月22日の博士号授与にいたるまでの文書がそろっている．ていねいに読んでみると，この当時のチッテル教授はミュンヘン大学哲学部第二部の学部長であり，かつ論文審査



第1図　ナウマン博士からチッテル教授への献呈の辞．
ナウマン博士がチッテル教授に贈呈した博士論文の別刷の扉に記された献呈の辞で，意味は「尊敬する先生，教授チッテル博士へ，感謝と敬意をこめて．著者」．長方形の印は「古生物学地史学博物館」

の主査でもあった．そして，ナウマン氏の論文は優秀であるというチッテル教授から正教授諸氏（日本式にいえば教授会）にあてた推薦文もあった．そうしてみると，何と，ナウマン博士はチッテル教授から博士号をもらった最初の弟子であったのである．そのときチッテル教授は35歳，ナウマン博士は20歳であった．

哲学部第二部とは？　ナウマン文書には哲学部第二部（Philosophische Fakultät, II. Sektion）という名称が頻繁に出て来る．これについてスモルカ氏に質問して得た答えと，西本夫人の補足説明とを併せてみると次のようになる．

もともと学問は，ヨーロッパにおいては神学（Theologie），哲学（Philosophie），法学（Jura），医学（Medizin）という四つの柱をもっていた．文学も歴史学もすべて哲学に含まれていた．そこに，近代科学が盛んになって自然科学の分野がいろいろと分かれて来ると，便宜上，哲学部をⅠとⅡに分けて，Ⅰをそれまでの伝統的な分野（哲学・文学など）とし，Ⅱを自然科学としたのである，と．そして，今でも，自然科学系は，本来の学問という意味では継子扱いだ，とスモルカ氏は笑っておられた．

だから，哲学部第二部とは，その内容の点では理学部にあたるわけである．これに関連していうと，Ph. D.（Philosophiae Doctor）という語も，そういう歴史を背負った言葉だから，場合によって理学博士と翻訳されるのもうなづけることである．ただし，私は，この種の仕事——ナウマン文書の翻訳と紹介など——においては，哲学部第二部あるいは哲学博士というような直訳を用いることにしている．

なお，事のついでにいうと，ミュンヘン大学というのは一種の略称あるいは通称であって，正式にはミュンヘン　ルートヴィヒ—マクシミリアン大学（Ludwig-Maximilian-Universität München）である．

博士試験は古生物学博物館で行われた．古生物学博物館はまた「バイエルン国立古生物学地史学博物館」（Bayerische Staatssammlung für Paläontologie und historische Geologie）ともいう．その館長は地質学教室の主任教授が兼任するのがならわしで，その地質学教室もすぐ傍にある．博物館の歴史は1759年に創設された科学アカデミーの蒐集物に始まるもので，1827年の動物博物館〔標本館といった方がよいかも〕を経て，1832年にはその中に古生物と地史の部門が生まれ，1843年には独立して古生物学地史学博物館となった．初代の館長がヴァークナー（J. A. Wagner），二代めがジュラ系のアンモナイト研究で有名なオッペル（C. A. Oppel），三代めがチッテルである．

そのチッテル教授の監督のもとで，ナウマンは博士試験を受けた．それは1874年12月9日10時～12時のことであり，場所は博物館のチッテルの研究室であった．ただし，その建物は，現在の場所ではなくて，もっと市の中心部に近いノイハウザー通りにあった建物だと推定される．現在の建物は1950年以後のものである．

ゾルンホーフェンの大きな蝶（？）の化石．マイヤー博士はたいへん気さくで親切な方である．博士の研究室での撮影が終わったところで，博物館の楽屋を見せてあげよう，ということになった．廊下を歩いていて，ひょいと中庭に面したテラスを指し，夏にはあそこでビールを飲むんだ，とひげづらの中でにやり．これだけで，やはり地質屋はいいなあと思う．

化石のクリーニングをする部屋，石膏模型をつくる部屋，採集してきたばかりのばらばらの骨を並べた棚など，さまざまなものがある．中で最も自慢そうであったのがゾルンホーフェンで最近発見されたばかりという昆虫の化石であった．一見したところ大型のアゲハ蝶のような形で，開張12cmくらい．前翅の後縁が左右一直線に近く，あたかも展翅板で丁寧に形を整えたかのように見事である．ただし尾状突起はない．

館長ヘルム博士の話．一段落したところで，館長がお呼びですという連絡が入る．地質古生物の研究所はどこも標本がいっぱいで，体を斜めにして歩くのが普通であるが，館長室だけは，いくらかゆったりしている．館長は話好きというのか．……

博物館の職員としては研究者が6名，技術者が5名，行政が3名，計14名である．驚いたことに，展示のための予算はゼロ．そこで後援会のような組織——友の会——がつくられていて，寄付をつのっている．いただいた年報を後になって見ていたら，大口寄付者の名簿の中

に，館長ヘルム博士やマイヤー博士の名前もあった．

館長の話によると，地質学は，初等教育において他の学問に比べて不当に低く扱われている，と．ドイツ，それもミュンヘンほどの恵まれた環境にあって，多くの優れた研究の行われた所で，そんな話を聞くとは思いがけないことであった．

博物館の年報（1989年，1990年）といくつかのパンフレットをいただき，またマイヤー博士は御自分の著作の「化石」という美しいカラーの普及書を全員に下さった．普及用のパンフレットの表題だけでも下に紹介しておくことにしよう．いずれも挿図が見事である．アルプスの氷期区分の本場だけあって，氷河関係の，そのまま教科書に借用したいようなものが少なくない．

「生命と過去——古生物学と地史学入門」第3版，1984，40ページ．

「証跡から見た氷河時代」，1987，48ページ．

「砂礫層と骨——ミュンヘンの地史から」改訂第3版，1986，40ページ．

4.　ミュンヘン大学資料室

ナウマン博士の成績は「優」ではなかった．ミュンヘン大学資料室は，ルートヴィヒ通りに面する大学本部の大きな建物の中にある（写真6）．そこのスモルカ氏の研究室に入ったのは予定よりかなり遅れていた．途中で電話して事情を説明しておいたのはもちろんであるが，それにしても実に気持ちよく応対して下さる．ここでは撮影はなくて，私の質問が中心である．

まず第一の質問は，いただいたナウマン文書を，そのままの形で，あるいは日本語に訳して，公表しても宜しいかどうか，という点である．これに対しては，ナウマン博士はすでに歴史上の人物であるから差し支えない，という返事をいただいた．何しろ，私がいただいた文書は枚数にして44枚もある．その中には，ナウマン博士が書いた博士試験の答案もある．また，ミュンヘンの実科高等学校〔あるいは工業高等学校〕の卒業証明書があって，その中には成績が評点Ⅲと書いてある．

写真6　ミュンヘン大学．
大学の正面玄関の前は小さな前庭になっていて，大きな噴水がある．しかし，正門といったようなものはなくて，いきなりルートヴィヒ通りに面している．

さらに，その下には評点Ⅰ，Ⅱ，Ⅲに対する説明が付記してあって，そのいずれも「合格」には違いないが，表現が微妙に異なっている．ナウマン博士の成績の評点Ⅲは，もちろん最高の，日本式にいえば「優」であるに違いないと思ったが，どうもおかしい．もしかしたら最低かも？　という不安をいだきながら確認を求めたところ，これはやはり，合格ではあるがその中の「可」であった．

「ナウマン博士の成績が最低だとは！」と驚いたら，「アインシュタイン博士は子供の頃は数学ができなかったそうですよ！」とスモルカ氏．納得．

審査員の一人はジーボルト教授であった．ナウマン文書の一つに，チッテル学部長が哲学部第二部の正教授諸氏に宛てた通知がある．その内容は「ナウマン氏は博士試験を受けるに必要な条件がそろっているので，許可してもよいと考える」といった趣旨のものである．そして，その後段には「同僚のフォン　ジーボルト氏も啓発的な判定を表明されるよう要請する」と書いてあり，その下にはジーボルト教授による添え書きがある．

日本で有名なかのP. F. v. ジーボルト（1796-1866）が，これよりずっと前の人である事はいうまでもないが，その次男のハインリッヒ　フォン　ジーボルトも日本に住んだことがあり，しかも東京付近に貝塚があることをナウマン博士から教えられて，“Notes on Japanese Archaeology with Especial Reference to the Stone Age”（1879）という論文を書いている（地質学雑誌，96巻12号の拙論参照）．その H. v. ジーボルトが，かつてはミュンヘン大学の教授として，ナウマン博士の論文審査に参加したのであろう，というのが，出発前の私の推測（期待？）であった．

ところが残念．スモルカ氏は笑いながら，「フォン　ジーボルト家は大変な学者一家で，たくさんの学者が出ている．それだけで一冊の本が出ているほどである．それを調べるのは簡単簡単！」というわけで，即座に一冊の本——大学の職員名簿？——を持ち出して来て，審査にたずさわったフォン　ジーボルトは動物学者であって，考古学のH. v. ジーボルトではない」，という口惜しい結果になった．

ナウマンはよそ者だ．さらに，スモルカ氏の所で奇妙

な手紙のコピーをいただいた．これは同氏を訪問した当日，「こんなものが出て来た」というわけで，わざわざタイプライターで清書しておいて下さった．私としては，もちろん初めて見るものであった．ライプチッヒのF．ラツェルという人がミュンヘンの某氏に宛てて書いた手紙である．この人は，スモルカ氏によると地理学者であるという．日付は1887年10月4日となっているから，ナウマン博士がミュンヘン大学の私講師になって半年ほど後のことである．

内容は，ミュンヘンの民族学博物館の館長の後任の席をめぐって「二人の候補者がしのぎを削っている．一人はブッフナーであり，もう一人はナウマンである」という前置きの後，口をきわめてブッフナーを誉め，口をきわめてナウマンをけなしている．そのブッフナーを誉める文章の末尾に，「彼は，周知のとおり生粋のバイエルン人です」と書いてある．

もちろん，これに対して，ナウマンはザクセン人ですとは書いてないが，結果において「ブッフナーは貴君の地元の出身者であり，ナウマンはよそ者ですよ」と言っているのと同じである．

今回のドイツ訪問で，複数の人から何度か聞いたことであるが，バイエルンは保守的な所だという．そして，「同郷」とか「郷党」とかいったような意識が濃厚な所だそうな．ナウマン博士が書いたものを読み，関係文書をあさってみても，こういうことはなかなか分からない．これこそ，現地を訪ねて話を聞くことが重要な理由の一つである．

ナウマン文書は目下研究中．ナウマン文書の中には「私講師に任命する」といったような改まった公文書もあって，これは実に見事な美しい手書きの字で書いてある．もちろん古典的なドイツ文字であるが，いわば楷書であるから，少し慣れれば難なく読めるようになる．しかし，中には行書や草書の文書もあって，私自身まだすべてを完全に解読できているわけではない．

これらの文書については，目下キッパース氏と共同研究を進めているところで，いずれ詳しく紹介する予定である．

5.　ナウマン対鷗外論争——2

『普通新聞』．ルートヴィヒ通りを挟んで，ミュンヘン大学とはす向かいにバイエルン国立図書館がある．ここで，デュファイ博士に面会したのは『普通新聞』を見せていただくためであった．『普通新聞』は鷗外の訳語であって，ドイツ語ではアルゲマイネ ツァイトゥンク（Allgemeine Zeitung）である．『若き日の森鷗外』（東大出版会，1969）という大著の著者である小堀桂一郎氏によると，「当時ドイツ語圏内でも最も高級なものの一つであった大新聞」である．

実をいうと私個人としては，必ずしもこの新聞を見る必要はなかった．というのは，ドイツ文学の専門家で鷗外研究の第一人者である小堀氏がすでに，この新聞記事のすべてを完全に日本語に翻訳し，この論争について，またその背景や前後の事情について，実に詳しく，かつ大変厳密に全貌を紹介し，また極めて冷静公平に批評を加えている．だから，この論争を知りたければ，小堀氏の本を読めば宜しいのであって，むしろ，その方がはるかによく理解できる．

とはいっても，テレビとしてはそうはいかない．テレビにとっては画像が命である．そこで，ぜひともこの新聞の原本を撮影しなければならない．私としても，もちろん反対なわけはない．それどころか，デュファイ博士にお目にかかり，『普通新聞』の原本をこの目で確かめる，というのは地質家が写真よりは標本を，標本よりは現地の露頭を見たがるのと同じである．

デュファイ博士の研究室は100平方メートルはありそうな大きな部屋で，天井がものすごく高い．窓側を挟んだ両側の壁は天井まで造りつけの書棚になっている．並んでいるのは圧倒的に和書と漢書で，きちんと整理されている．もちろん，その大部分は古典で，たとえば和書の背文字には変体仮名が多く，私にはよく読めないものがある．何しろ博士は東洋部の部長で，日本語が達者である．いただいた名刺には，中国風に「杜亜鳳」とも書いてある．

ここでは，デュファイ博士が書棚から問題の新聞を取り出し，ナウマン博士の「日本列島の地と民」の「そこで船は横浜の港内をぐるぐる輪を描いて走りながら機関が自然に停まるまで待っているよりほか仕方がなかった」というくだりを，指でたどりながら朗読する，という有り様が撮影された．しかし残念ながら，この場面は最終的にはカットされた．

論争の概要．この論争について，その内容を簡単に紹介するのは容易なことではない．何しろ小堀氏の本の「第二章 ナウマン博士との論争」は109ページ，400字づめ原稿用紙に換算して270枚ほどに達する．それに，論争の内容はいくつもの事項にわたり，かつそれぞれの主張は，しばしば微妙な文章によって表現されている．だから，ここでは内容を具体的に紹介することを諦めて，外面的な概要を紹介する．もちろん根拠は小堀氏の著書である．

この論争の発端は『普通新聞』に掲載されたナウマン博士の論文である．以下，論争の経過を表にすると，

1886年6月から1887年2月にわたり，次のとおりである．それぞれの表題の後につけた〔　〕の中の数字は，400字づめ原稿用紙に換算した場合の枚数である．

6月26・29日　ナウマン：『日本列島の地と民』〔62枚〕
6月30日　ナウマン：ミュンヘン人類学会における講演の要旨〔8枚〕
12月29日　森林太郎：『日本の実情』〔26枚〕
1月10・11日　ナウマン：『森林太郎の「日本の実情」』〔15枚〕
2月1日　森林太郎：『日本の実情・再論』〔15枚〕

小堀氏の「論争についての評釋」．小堀氏の論文の末尾には，論争の争点が項目を分けて検討されている．その項目を見るだけでも，論争の内容がどのようなものであったか，およその見当がつく．すなわち，次のとおりである．

日本人の起源をめぐる問題
アイヌの待遇についての論争
日本人の食生活について
奥地では人はほとんど裸で歩いている．
日本人の健康状態に関して
盲人の数
既婚婦人が眉を剃り落し，歯を黒く染めるという風習
幼児が六歳まで母の乳を飲むという観察
家康の法律についての言及
芸術
宗教と伝説

もちろん，これら個別的・具体的な争点のほかに，総括的な問題として，日本の文明開化の程度をどう見るか，その場合の日本人の活動は自発的なものであったか他発的なものであったか，というような基本的な問題がある．この点では，最初に紹介した鷗外の日記，すなわちドレスデンの前哨戦について，彼が書き残した文章が印象的である．すなわち，鷗外が紹介しているナウマンの言葉，

『諸君，日本が開明の域へ進んでいる状態にあるのを見て，日本人が……自ら憤激して進取の気性を示したものと思いなさるな．これは外人にせまられて，止むを得ず，その状態になっているのである』

という見方に対して，「それは違う」といえるであろうか．この問題について，小堀氏は実に適切な意見表明を行っている．すなわち次のとおりである．

「ただ私はここで夏目漱石が明治四四年和歌山で行なった講演『現代日本の開化』の中の，次の印象的な一節を思い起さざるを得ない．そこで漱石は＜それで現代の日本の開化は前に述べた一般の開化と何処が違ふかと云ふのが問題です．若し一言にして此問題を決しやうとするならば私はかう断じたい．西洋の開化(即ち一般の開化)は内発的であって，日本の現代の開化は外発的である＞と，文字通りに断言しているのである．」

というわけで，この論争に関心のある方は，ぜひ小堀氏の論文を読んでいただきたい．その中に全文翻訳されているナウマン博士の論文「日本列島の地と民」だけでも，当時の日本を旅行した外国人地質家の記録として，実に興味深いものがある．

とはいっても，私にも意見がないわけではない．というのは，小堀氏の次の文章が気にかかる．

うってつけの目撃者？　「ところで證人と言えば両者の論争には，もう一人まことにうってつけの目撃者が居たのであって，それは他ならぬナウマンの東大講師時代の彼の学生であり，地質調査所技師長時代には所員として，直接彼の踏査事業を補佐していた横山又次郎である．この人も鷗外と同じ時期にミュンヘンに滞在しており，当然舊師たるナウマン博士とも交際があった．鷗外とはカフェで偶然に知り合った．そのときのことは，『独逸日記』に，＜夜王国骨喜店〔コーヒー店〕Café Royal に至る．一邦人に逢ふ．横山又次郎と曰ふ．此に来て地底古物学 Palaeontologie を修むとぞ．痩小にして色黒し．洋服にて日本風の禮を行ひ，隣席の人々を驚かしたり＞と書かれている．明治一九年八月三〇日のことである．この人をうってつけの目撃者というのは，彼が両者の論争をナウマンの側からも見ることができた唯一の日本人だったからである」．

というように，横山博士を『うってつけの目撃者』として高く評価している．けれどもそうであろうか？

けしからんのは横山教授だ．横山教授は『文芸春秋』の昭和3年4月号(1928年)に「森鷗外・ドクトル，ナウマンを凹ます」という文章を書いている．この表題だけでも，オヤッという感じであるが，最初の項目の見出しが「怪しからぬドレスデンの演説」となっている．もちろん，ドレスデンの演説とは1886年3月6日のナウマン博士の講演のことである．この場合も読みにくい漢字や表現を少し変えて要所を紹介すると次のとおりである．

「当時欧州人の日本に関する知識は極めて幼稚なものであった．すなわち，その多数は日本とシナとの区別さえ知らず，中には日本はシナの一部であろうなどと言うものさえあった．そしてわが留学生が，途上，小学生や労働者に，シナ人，シナ人と罵られることも珍しくなかった．

このような時代であったから，ナウマン先生の演説は珍国に関するというので，すこぶる盛況をきわめた．

しかるに先生は，聴衆の好奇心でもあおるためであったか，わが同胞の裏面まですっぱぬいて，時に嘲弄的な語さえ加えたのであるから，その演説が，紳士の演説として穏当を欠いたことはいうまでもない．しかし，御本人は聴衆の意を迎えたつもりで，始終満面に得意の色を浮かべていた．

ところが，いずくんぞ知らん，この聴衆の中には，当時まだ少壮の森鷗外という熱血男子のいたことをだ．この頃ライプチッヒにいた鷗外は，日本に関する演説と聞いて，わざわざドレスデンまで出かけて行ったのであった．

鷗外は演説が終わるやいなや，直ちにその座席に起立して，ひと声高く，

『絶東国の一男子森林太郎ここにあり．今の演説には誤謬多し．異議を挾む』と叫んだ．

すると視線が一斉に鷗外の方へ向いたのみならず，ナウマン先生の演説ぶりに嫌気をもよおしていた連中は，紳士といわず貴女といわず，皆さかんに拍手して，鷗外に同情を表した．これがために，演説者その人は，その予期に反して，少なからず器量を落とした．」

さて，

「この頃，鷗外はライプチッヒにいた」というのは明白な間違いである．けれども，これは単純な思い違いであって，本質的に重大な間違いではないといってもよい．ところが，その後はひどい．これは間違いではなくて捏造である．そのことは，最初に紹介した鷗外自身の「独逸日記」の記録と比較すれば一目瞭然である．けしからんのはナウマン博士ではなくて，かくもひどく事実を捩じ曲げた横山又次郎教授である．

第一，横山教授はそのとき，まだ日本にいたのであって，もちろん，その講演会には出席していなかった．

いったい，横山教授は何のために，そんなでたらめを書いたのであろうか？　読者の好奇心でもあおるためであったのだろうか？（以下次回）

YAMASHITA Noboru (1992): Visits to relations and surrounding places of Dr. Edmund Naumann II. München.

＜受付：1991年6月18日＞

地学と切手

スピッツベルゲンの炭坑夫

P. Q.

スピッツベルゲンはノルウェーの北方約600kmの北極海にある．公式にはスヴァルバール（Svalbard）と呼ばれる．面積は約62,000km²，北海道の約4分の3倍であるのに，人口は1962年調べでは2,781人で，そのうちロシア人は約2,000人である．世界最北の定住地である．

12世紀にヴァイキングによって発見されたと伝えられるが，ヨーロッパ人に知られるようになったのは16世紀末以降のことである．多くの島からなり，大部分は標高300～600mで，土地の90％は氷河に覆われて，北部には世界最北の新期火山と温泉がある．地下200～300mまで永久凍土で，夏は表面から1mほど融ける．第三紀層の地層中にはカエデなどの植物化石があったり，白亜紀層中に恐竜イグアノドンの足跡化石が発見されたりしているので，当時の温暖な気候が推定される．

1925年42カ国が参加した条約では正式なノルウェー領として認められたが，その際にソビエトも石炭の採掘権を得ることとなった．石炭は西部のロングイールビエン付近に産し，1,400万トンの埋蔵と言われている．ソビエトは年産約40万トン，ノルウェーは約30万トンと言われ，積み出しは夏に限られている．ソビエトは約100億ルーブルを開発に投資したが累積赤字がふくらんで行く．それでも操業を止めるわけにはいかないのは国益がからんでいるからである．事情はノルウェー側も同じで，島の主権を維持するため，7カ所のうち5カ所を閉鎖しながら操業をつづけている．

ほかに亜鉛・石こう・鉄鉱があるが開発されていない．

資源で重要なのは石油である．両国のほかにイギリス・西ドイツ・スウェーデンがノルウェーとの間に探査権契約を結んでいる．ノルウェーは陸上の外に力を入れているのはバレンツ海の海底石油であるがまだ成功していない．

切手は1975年にノルウェー帰属50年を記念して発行された3種のうちで，帰宅する炭鉱夫を表わしている．